

ヘレンド窯の 主な文様と装飾技法

ヘレンド窯では創業以来、中国や日本の磁器類をはじめ、

マイセンやウィーンなどヨーロッパ諸窯の製品から文様を写してきました。

やがて、それらを吸収発展させて固有の様式を創り上げ、顧客の名を冠したり

エピソードなどを加えて付加価値を高め、独自の展開をみせました。

ここでは、本展示会の出品作品に描かれた代表的なものをご紹介します。



ウエールズ文 [作品No.99、100、101、102]

二重の器壁の外側に卍や円圈などを配した透彫を、内側に絵付けによる圏線などを表わしたもの。レースのように精緻な透彫を通して内壁の文様が見える。1873年のウィーン万国博覧会(以下、万博)で、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世が大英帝国皇太子(プリンス・オブ・ウエールズ、後のエドワード7世)へ、この装飾のディナーセットを贈ったことに由来する。器壁に広く透彫した器物は、ヨーロッパ向け輸出品として17世紀中頃の中国で大量に生産された。碗、鉢類では錫の内貼りをして実用したともいう。二重器壁に透彫装飾の器も17-18世紀の中国陶磁、それらを写したマイセン窯などで例がある。



ヴィクトリア文 [作品No.34、35、112]

または、クイーン・ヴィクトリア。東洋風の各種の折枝花とその間を飛び交う蝶の姿を、器表に大きく描いたもの。1851年のロンドン万博で初めて披露された。ヴィクトリア女王は、明るく華やかな図柄を気に入り、ウインザー城用としてディナーセットを注文した。このディナーセットが万博で1等賞を獲得したことにより、ヘレンド窯は国際的な名声を確立した。文様は女王に敬意を表して「ヴィクトリア」と称され、ヘレンド窯を代表するものとなった。微妙な濃淡表現による絵付けには、清時代の粉彩磁器、あるいはそれらを写したマイセン窯やウィーン窯などの影響がうかがえる。



エステルハージ文 [作品No.81、82、83、84、85]

器表に蠟などで文様を描き顔料を塗って焼成する、いわゆる蠟抜き技法とされる。しかし、文様の輪郭や透明釉と赤地部分の層位などを観察すると、掻落し技法ではないかと思われる。器の内面に赤白を反転させて同じ文様を描く場合もある。ヘレンドの北東約30kmの町パーパの、エステルハージ邸の応接間用として制作された器類に描かれたことからついた名称。ロシアのサンクトペテルブルクから持ち帰られた中国磁器をモデルにしたと伝わる。エステルハージ家は17世紀から続くハンガリーの貴族であり、創業時のヘレンド窯の最大の後援者であった。



「広東」様式 [作品No.77]

赤、黄、緑、青など様々な色絵具を用いて描かれた中国人物図。金彩も併用して、余白をほとんど残さずに器表全面に説話や戯曲に材を取ったかのような情景が描かれる。清時代の広東省広州で盛んに生産された広州彩磁、或いはそれを踏襲したヨーロッパ産磁器を写したと考えられる。広州彩磁は、清時代初期の17世紀に、景德鎮窯産の白磁類を広州に輸送してその地で絵付けした、ヨーロッパへの輸出用磁器である。18世紀末から19世紀初期には、100箇所以上の絵付け工房があったという。中国的な図柄のほかに、ヨーロッパ風の紋章や花東文、花緑文などを描いた例なども残る。



キュバッシュ文 [作品No.37、38]

葉型の窓内に華麗な花卉文を配し、窓の外周に竹の幹や葉、白い小花を描いた装飾。竹や小花文の余白にはさらに茶色の小さな渦文を埋め尽くし、器の外縁には金彩渦文も加えて豪華さが際立つ。個々の文様や、全体の構成は中国陶磁にもとづくと考えられる。1862年のロンドン万博後、C.H.キュバッシュという名の伯爵がヘレンドにこの文様の製品を注文したことが、名称の由来となったという。キュバッシュ伯爵については現在、これ以上の情報はないが、一説によると領事であったとも伝わる。



京都文 [作品No.114]

金地に草花文を背景とした着物姿の女性が描かれた円圏を器表の各所に配し、その周囲を、同じく色絵と金彩の草花文で埋めた豪華な意匠。女性の姿は、子供を抱くものと座るもの二種がある。人物の表情や着物の簡略さと、草花やその背景となる水裂文の精緻な描写が対照的である。名称の由来は明らかではなく、同じ文様が描かれた作品も現在のところ他にはない。金彩を多用した、蒔絵をイメージさせる意匠から、日本の工芸品に触発された呼称とも考えられる。



金魚図 [作品No.44、107、109]

中国の魚藻文に由来し、“ポワソン(フランス語で魚)”シリーズの名がつくが、実際には水中を泳ぐ金魚を上から見た様子を描いたもの。金魚の姿や藻の形、全体の構成などは定型化されており、時代を経ても繰り返し同一のパターンが描かれていることから、特定のモデルがあったものと思われる。金魚は中国南部の原産とされ、宋代に飼育、愛玩する趣味が始まったといわれる。その音“qin yu”が“金余”に通じ、吉祥の図柄として絵画や工芸のモチーフとしても用いられた。ヨーロッパ世界へは17-18世紀頃に伝わったとされ、当地では見ることのない姿の魚として珍重されたようである。



ゲデレー文／シアン・ルージュ(西安の赤) [作品No.67、103]

白地と赤地の文様帯を交互にもうけ、白地部分には植物文を、赤地部分には蔓草文を描いたもの。植物文は、中国の松竹梅文を手本に様式化したもので、もともと“シアン・ルージュ(西安の赤)”と呼ばれた。同様の文様構成で、赤地部分を黄色にしたものは“シアン・ジョーヌ(西安の黄)”，黒色にしたものは“シアン・ノワール(西安の黒)”と呼ばれる。シアン・ルージュは、ハンガリー国王でもあったフランツ・ヨーゼフ1世と妃のエリザベートのハンガリー国内での居城、ゲデレー宮の備え付け食器の文様として採用されたため、後に「ゲデレー」文とも呼ばれるようになった。



皇帝文 [作品No.31、36]

蓮や牡丹の花と花籠、鳥、猫、童子などが、装飾的な周縁文様とともに描かれた、東洋的情緒あふれる文様。粉彩、金彩などの技法が用いられ、特にピンクと金色使いが印象的である。容器の蓋つまみ、把手、脚部などは清朝官僚の姿を象って装飾されている。18-19世紀のヨーロッパにおけるシワズリ流行の中で、中国人の姿を表現したものは建築装飾、絵画、彫刻など各種があるが、器物の一部に実用と装飾を兼ねて自在にあらわれたという点で、他に類を見ない独創的な造形である。花籠の傍らには、オランダ人画家コルネリス・プロンク原案の「傘美人図」皿に登場する鳥の姿が写されている。



獅子図／朝鮮獅子図 [作品No.50、122]

マイセン磁器の「獅子」文を写したもの。マイセンではこのような姿の動物を「朝鮮の獅子」、「緑の獅子」などと呼び、鶴や花卉と組み合わせたものが描かれた。柿右衛門様式の文様が祖型とされるが、柿右衛門様式には同一の文様は見られない。有翼有尾で大きな口や耳(角の変形か)を持つ四脚の動物としては、むしろ麒麟のイメージに近いのではないかと考えられる。中国でも日本でもなく、「朝鮮の」とされている理由については明らかではない。



博士文 [作品No.106]

樹下に4人の人物の図。本作には、モデルとなった18世紀前半の景德鎮窯産の五彩磁器があり、ヴィクトリア&アルバート美術館、グローニンゲン美術館などの所蔵例が知られる。それらは、オランダの画家コルネリス・プロンク(1691-1759)が、オランダ東インド会社の求めに応じて描いた「博士」と題された原画をもとに制作された。オリジナルに比べるとヘレンド窯の製品は描写が簡略化される一方で、外周部を透彫装飾で飾るなど独自の工夫も見られる。プロンクは計4種の図案を描き、「博士」を含んだ3種については作品が現存している。最も知られる「傘美人図」は、伊万里磁器でも写されている。



ハンガリアン・ナショナル文 [作品No.119、120、121、124]

19世紀末のハンガリーでは1896年に開催される「建国1000年祭」に向けて、愛国的な気運が盛り上がり、民族固有の文化への関心が高まった。その流れの中で装飾文様についての研究も熱心に行われた結果、ハンガリー民族独自の文様表現として誕生したもの。様式化された石榴、チューリップ、カーネーション、菊、蔓草などからなる。図柄の形態や色調には東洋的要素がうかがえ、ヨーロッパ中央とは異なったハンガリーの歴史的、風土的特性が強く感じられる。陶磁器にとどまらず、建築、家具、金工、ガラス、染織などの装飾や挿絵などにも多用された。



ミラマーレ文 [作品No.71]

フランツ・ヨーゼフ1世の弟フェルディナント・マクシミリアン大公(1832-1867)が、トリエステ(現イタリア領)に建設したミラマーレ(ミラマーレとも)宮殿用のディナーセットに描かれていた文様。染付と色絵、金彩を併用し、パゴダ、城塞、果樹等が描かれる。城塞の描き方は、塔や回廊の目立つ実際の宮殿外観の一部を思わせる。ミラマーレ宮殿には、中国風や日本風の部屋も設けられていたという。フェルディナント・マクシミリアン大公は、1864年にメキシコ皇帝マキシミリアン1世として即位し、メキシコに渡ったが、共和派との戦いに敗れて捕えられ、1867年6月に処刑された。



ラノルデル文 [作品No.42]

キュバッシュ文と同様、白地に華麗な花東文を描き、それを縁取るように茶色の渦文を背景とした装飾的な花文を配したもの。牡丹、蓮、菊など東洋的なモチーフにもとづいたと考えられる花文には、粉彩や金彩の技法が併用され、白地を背景にたいへん華やかな文様となっている。ヤーンシュ・ラノルデル(1806-1875)は、ヘレンド南東約20kmの町ヴェスプレームの司教・大学教授で、ヘレンド窯創業時の支援者であった。彼にちなんでこのような構図の文様を、ラノルデル文と呼んでいる。



ロスタチャイルド文 [作品No.29]

木の枝にとまる鳥と、同じく枝にかかる首飾りを描いた図。某日、ロスタチャイルド家での園遊会中に、首飾りが行方不明となり、その後、木の枝にかかって小鳥の遊び道具となっているのが発見された逸話にちなんでされている。ロスタチャイルド家は、フランクフルト出身のユダヤ系一族で、18世紀後半より商業において頭角を現わしヨーロッパ中に進出した。19世紀初頭には金融業を開始し、ウィーンにも銀行が開業された。ヘレンド窯は創業時にウィーンのロスタチャイルド銀行から資金融資を受けるなど密接な関係を持っていた。



ワトー風人物図、風景図 [作品No.22、24、25、26、93]

18世紀フランスのロココ様式を代表する画家アントワヌ・ワトー(ヴァトーとも、1684-1721)の絵画や銅版画に着想を得た田園詩的、牧歌的な人物図や風景図。ワトーの作品は没後1726年から35年に版画集として集成され、広く流布した。マイセン窯では1730年代からワトーの作品に想を得て、ロココ風の絵画文様を描き始めた。ヘレンド窯ではこのマイセン磁器をモデルにした制作が行われた。